ソビエトスポーツイデオロギーにおける政治的中立性について

佐　野　　裕*

The Sport Ideology viewed as a Political Neutralism in USSR

Hitoshi SANO*

ABSTRACT

Nowadays, there are two sport theories, so-called the compensation theory is rather widespread in the western sociology of sport, which is said the principal and function of modern sport lies in compensating hypodinamics (insufficient motor activity). And the other theory asserts that sport is a neutral zone for politically. Adherents of these theories ignor the fact that sport largely depends upon concrete historical socio-economic conditions.

Accidentally, the boycott Moscow olympic game in 1980 presented us a actual problems about the relation of sport and politics. This suggest that sport is definitely not political, nor is politics free of sport.

In above mentioned, this report aims to consider the relation of sport and politics by through the analysis of the sport ideology in the USSR.

I 問題の所在

スポーツ問題はこれまで，スポーツの「純粋性」とか「政治的中立性」などというスポーツ理念に支えられて，スポーツをとりまく政治や社会，経済的諸問題との関連の中で，その問題性が論じられることが少なかった。スポーツ問題における政治的後進性の原因の一つに，こうしたスポーツ観念の存在することを否定することはできない。「政治的中立性」という名の下の「政治的無関心」は，体育・スポーツ関係者の至高の価値，エートスとして人格化され，スポーツの政治への隷属を許す精神的土壌を形成する一因ともなってきたといえよう。

それは既成事実に屈服する日和見主義への傾斜を常にもち，思想としては「現実」を後追いするだけの無定見な〔現実主義〕として結果する。

こうした状況の下で，1980 年モスクワオリンピックボイコット問題は，政治とスポーツとの関係について鋭い問題を提起した。スポーツ組織の自主性，自律性の在り方が厳しく問われる中で，「政治的中立性」の意味が改めてクローズアップされたのである。

即ち，スポーツの「純粋性」とか「非日常性」「無目的的活動」などにスポーツの本質を

* 体育教室 (Dept. of Health and Physical Education)

みるスポーツ観念の非現実性は，今や誰れの目にも明らかとなり，単に「気晴らし」や「楽しみ」「アゴーンとしてのプレイ」等々に重心を置いたスポーツ理解である所謂「プレイ論的スポーツイデオロギー」の現実に対する理論的射程距離，その妥当性の限界が顕在化したのであった[1]。

ところで，John W. ロイや Gerald ケニヨン等が指摘するように，スポーツは冷戦の一つの vicarious mechanism という機能をになわされ，スポーツを内政，外交政策上の political propaganda weapon の一つとしたり[2]，あるいはナショナルインテグレーションの手段として利用する例は，1936 の“ナチオリンピック”にとどまらず，それは 1968 年のメキシコオリンピックにおけるブラックパワープロテスト (Black power salute) や南アメリカのアパルトヘイドに対するサンクション等にもみられるように，人種問題や民族問題の政治的目的達成の手段としても使われている[3]。

こうした今日のスポーツ内外の状況において，スポーツの「政治的中立性」とはいかなる意味と機能をもちうるスポーツ理念であるのか。それは既にのべたように，現実の政治に引きづられ，政治に従属するスポーツの姿を隠蔽する単なる口実に堕してしまっているのか。あるいはまたそれは，政治の世界とは異なる独自の歴史と論理をもつスポーツの世界の，自主性，独立性を守る城砦として機能しうる理念なのか。その真の機能が改めて問いなおされなければならないといえるだろう。

確かに competing political ideology は社会的レベルは勿論，sport milieu に於ても鋭く存在し[4]，「スポーツは明らかに，非政治的でないばかりか，政治的に自由でもない」[5]という指摘は，Avery ブランデージの主張するナイーブな「スポーツは完全に政治から自由である」という考え方とは異って，スポーツの現実から出発している。

つまり，スポーツはメダルやチャンピオンシップを通して，その国の国際的威信を高める機能をもつかも知れないし，国の内外にその体制的優位性を誇示するプロパガンダとして有効であるかも知れないという現実が，スポーツと政治との間には存在しているのである。こうしたスポーツのもつ今日的機能に着目する時，スポーツを実定法上，国民の基本的権利の一つとして位置づけるソビエトにおいて[6]，スポーツの「政治的中立性」とは如何なる意味をもっているのであろうか。このスポーツの「政治的中立性」とは，ソビエトスポーツイデオロギーにおいては無縁のスポーツ理念であり，それはブルジョアスポーツイデオロギーとして単に批判の対象としてのみ存在するスポーツ観念であるのか。

J. Riordan が論ずる様に，ソビエトではスポーツは常に国家によってコントロールされ，それは労働と軍事訓練，あるいは全面的に発達した理想的市民の育成という目的のために，社会主義文化の重要な構成部分として位置づけられている[7]。スポーツでの勝利はソビエト社会体制の勝利であり，社会主義スポーツシステムの勝利であり，それは腐朽しつつある資本主義文化に比して，社会主義文化の優位性を示すものと位置づけられているという[8]。政治の世界における現在のソビエトのパワーポリテクスは，スポーツの世界に於てもオリンピックにおけるメダル獲得競争として顕在化しているが，それはスポーツにおける覇権主義的傾向を示すものとも受けとられる。

一般に，その国のスポーツ界の果たしたマイルストーンをはかる唯一の規準は，決してオリンピックのメダル獲得数などでないことは自明のことであるようにも思われるが，今日のスポーツ状況は，勝利至上主義，メダル至上主義を一つの極北点としている。

とはいえ，ソビエトのこうしたスポーツ政策を，アフガニスタン侵攻やポーランド問題との関連で，スポーツ界における粗暴な大ロシア人的 Держиморда[9] のあらわれとして把えることは一面的であるといえよう。ソビエトスポーツイデオロギーの研究は，いたずらに政治主義的に傾斜して，単に社会主義の「退化」や「非人間性」「貧弱」を性急に論ずることでもなければ，また逆に未だ発展しつつある「生成期」にある社会であるとして，その「後進性」や「否定的側面」に盲目であることでもない。

極めて政治的性格をもつとされるソビエトスポーツイデオロギーを通して，「政治的中立性」というスポーツ理念を考察することが本稿の目的でもある。

注

1) 拙稿「スポーツ権論のイデオロギー」『体育研究』日本体育学会，神奈川支部会，第 14 号，1981, pp. 1-8 で「スポーツイデオロギーの社会学的生産力」という視点から「プレイ論的スポーツイデオロギー」の問題点について論及したので批判されたい.
2) Victoria de Grazia, *The culture of consent. Mass organization of Leisure in fascist Italy*, (Cambridge, 1981).
3) John W. Loy, Barry D. McPherson, Gerald Kenyon, *Sport and Social Systems. A Guide to the Analysis, Problems, and Literature* (Addison-Wesley Company, 1978), pp. 287-289.
4) 同上, p. 287.
5) 同上, p. 288.
6) P. Stepovoi, "*Physical Culture and Sport: Legal Guarantee*", *The U.S.S.R.: Sport And Way of Life* (Moscow, 1980), pp. 120-126.
7) James Riordan, *Soviet Sport. Background to the olympics* (Blackwell, 1980).
James Riordan, *Sport under Communism. The U.S.S.R., czechoslovakia, The G.D.R., China, Cuba* (London, 1978).
James Riordan, *Sport in Soviet Society. Development of Sport and Physical Education in Russia and the U.S.S.R.* (Cambridge, Mass, 1977).
8) 同上, *Sport in Soviet Society*, p. 364.
9) 不破哲三「スターリンと大国主義」新日本出版社，1982, p. 40 より転引用. ここではスポーツの世界に於けるパワーポリテクス，スポーツに於ける人間的なものの無視という粗暴なスポーツ観，態度を象徴する.

II スポーツイデオロギー

Jorge Larrain の論考にまつまでもなく，イデオロギーとは，もっとも equivocal で，elusive な概念の一つであるかも知れない[1]。それは政治的な含意を深くになって使用されるばかりでなく，日常的にも多様な意味で用いられており，理論的にも立場によって異った意味と機能をもってつかわれる。たとえばイデオロギーとは虚偽と隠蔽 (Lügen und verhüllungen) であり，真正ならざるもの (unrichtigen)，真理ならざる (unwahren) 言表とみなされるように[2]，「イデオロギーは虚偽意識」であり，客観的，認識的現実に属

さない構成要素を含むすべての立言は，イデオロギー的であるとする解釈は，イデオロギーとは「現実から偏向した思考であり，思想であり，判断であり，従ってなんらかの意味で虚偽であって，真理でない[3]」とする概念規定といえるだろう。

ところで，「人間は，その生活の社会的生産において，一定の，必然的な，かれらの意志から独立した諸関係を，つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係をとりむすぶ。これが現実の土台となって，そのうえに，法律的，政治的上部構造がそびえたち，また一定の社会的意識諸形態は，この現実の土台に対応している[4]」とする史的唯物論の立場は，社会的意識の諸形態というカテゴリーをめぐっての論議はあるにせよ[5]，イデオロギーは存在の意識における反映であると規定する。しかし，いずれの立場をとるにせよ，広義には「社会心理」のようなものも含めて，それには所謂 illusory ideology と Scientific ideology の二つの存在形態が予想されるのである[6]。藤田は社会的心理とイデオロギーの区別の必要を主張し，社会心理とは，感情，習性，性向，志向，性格等々の言葉で表現される感性的意識形態の総体であって，自然発生的性格，非体系性，非定型性を特徴とするものであり，イデオロギーとは，相対的にではあれ一定の体系性をもつところの，理念，見解等の総体であると，階級意識という点からの区別を論じている[7]。

確かに，イデオロギーは社会的意識の一形態であるが[8]，しかし「つねに一定の社会で生活し，一定の階級の成員である人間の実践的な社会的行動は，イデオロギーの源泉であるとともに，またイデオロギーの目的でもある[9]」と理解すれば，それは社会的意識の価値志向を統制する機能をもつと同時に，イデオロギーには，この人間の実践的な社会的行動の発展状態と一定の諸個人，諸集団の諸要求と諸利益が反映しているといえるだろう。即ち「科学が客観的実在の概念，言明等における反映であるのに対して‥‥，イデオロギーは社会的活動を規制する規範と指針という形態で実現される[10]。」従って，科学的イデオロギーも含めて，いかなるイデオロギーといえども，その理論的，実践的正当性の主張は歴史的制約の範囲内にあることを忘れてはならないだろう[11]。

スポーツイデオロギーもこうしたイデオロギー諸形態の一つである。一般的にそれは，スポーツに対するものの見方，考え方の総体であるといえるが，いみじくもパーキンがマルクスを引用して論じたように[12]，“the ideas of the ruling class are in every age, the ruling ideas”[13] が考察の前提条件となる。

たとえば，今日の支配的なスポーツ観念であるアマチュアリズムは，近代イギリス資本主義社会の生成発展の歴史の中で，それまでの中世封建農民の身分制的な，賦役的，貢納的スポーツや貴族の特権的なスポーツが，封建社会の解体過程の中で歴史の舞台からドロップアウトするのに代って，「自由」「平等」という旗印の下に擡頭した 19 世紀イギリスの新興ブルジョア階級のものの見方，考え方を反映し[14]，ブルジョア民主主義革命という歴史的進歩の中でその地理的，文化的普遍性を獲得していった例にみるまでもなく，スポーツイデオロギーもその時代の支配階級の思想を反映する。

さて，今日の支配的なアメリカのスポーツ信条といえば，その思想的背景に，Ameri-

can success ideology を考えなければならない。アメリカンドリーム，それは，人間は生れながらに自由，平等であり，おのれのベストをつくして努力すれば社会的に成功し，トップに上昇できる権利と（義務）をもっており，そのチャンスは，すべての者に平等に開かれているという信念である。それは competitive ethos の社会的正当化であり，Sadler のいう "Winning is the only thing" である[15]。達成，競争，勝利，そして成功への衝動，優越の維持，これらはアメリカの期待する信条であり，フォード元アメリカ大統領の次のようなメッセージにその一つの典型例をみることができる。

「今日のアメリカに於て，競争スポーツに参加することなしに成長する若者は一人もいない。スポーツは若者をその生活のために準備するだけでなく，その精神はアメリカの競争的精神の一部分をなす。国家のために，われわれは，身体的にも，精神的にも体力 (fit) を鍛えなければならない。なぜなら，今日の困難な時代は，われわれにただ単に競うだけではなく，卓越することを要求しているからである」

まさに "sports triumph can be as uplifting to a nations spirits as a battlefield victory" といえよう[16]。

とはいえ，こうした資本主義社会における，いわゆる人生というゲームのルールは完全にニュートラルであり，スポーツと同様にその成功は，基本的には個人のアティテュードにかかわっており，激しく競い，決してギブアップせずに努力すれば，勝利を得ることができるという信念も，競技における勝利者は常に一人であるという事実の前では，一ツの mythology に転化する。しかし，敗者は good Losers であることを学び，勝利を失なったのは，基本的には努力が足りなかったからであると教えるプロティスタンティズムの倫理によれば，スポーツはまさにアメリカにおける支配的イデオロギーを賦括増強する機能をもつものと位置づけられよう。

確かにアメリカのスポーツ信条は，今日過渡的状況にあるとはいえ[17]，スポーツは，

1) 上昇志向という価値観の普及 (high aspiration)
2) 社会化を操作する過程の援助 (socialization)
3) (強制された) 一体感の育成 (coerced conformity)
4) アメリカ的なものの受容の向上 (acceptance of the American success ideology)[18]

以上の様な機能をになっているという論議の成立し得る思想的基盤，現実がそこには存在するといえる。

いずれにしろ，スポーツイデオロギーは，スポーツ独自の歴史と論理を内包することは当然であるが，それはスポーツ以外の世界，政治や経済との社会的諸関連をたちきったところに存在するものではないことを，ここでは確認しておきたい。

注

1) Jorge Larrain, "*The concept of Ideology*" (Hutchinson, 1979), pp. 12–34.
2) 早瀬利雄「現代社会学批判」新評論，1972, pp. 120–128.
3) T. ガイガー，大木普訳「イデオロギーと真理」新泉社，1971, p. 228.

4) K. マルクス，武田隆夫他訳「経済学批判」岩波文庫，p. 11.
5) 秋間 実「科学論の世界」大月書店，1974，pp. 8-36.
K. マルクス大学哲学研究集団著，岩崎允胤訳「科学論」法政大学出版部，1971，pp. 72-106.
藤田 勇「法と経済の一般論」日本評論社，pp. 11-59，pp. 76-92.
榊 利夫編「土台・上部構造論」合同出版，1977.
雑誌「経済」No. 57，1969，pp. 189-213.
6) V. Z. Kell, "*Ideology as a Phenomenon of Social Consciousness*" in *Philosophy in the U.S.S.R., Problems of Dialectical Materialism* (Moscow, 1977), pp. 258-269.
7) 前出 5)，藤田 勇，p.79 及び p. 89 の脚注.
8) 前出 6)，V. Z. Kell, p. 258.
9) 前出 5)，K. マルクス大学哲学研究集団，p. 91.
10) 同上.
11) 前出 6)，pp. 32-37.
12) F. Parkin, "*Class Inequality and Political Order*" (London, 1972), Loy etal "Sport and Social System" (Addison-Wesley, 1978), p. 381 より転引用.
13) K. マルクス，F. エンゲルス，真下信一訳「ドイツ・イデオロギー」国民文庫，大月書店，1967，pp. 89-96.
14) 布施善克「近代スポーツの発展とアマチュア規範—19 世紀の英国」『東京医科歯科大学教養部研究紀要』No. 1，1971.
村岡健次「19 世紀イギリス・ジェントルマン—その変容の諸契機」『思想』No. 612，1975. 6.
山本正雄「スポーツの社会経済的基礎」道和書院.
中村敏雄「近代スポーツの論理」『現代スポーツ論』所収，大修館.
15) W. A. Sadler, "*Competition out of bounds: A sociological inquity into the meaning of sports in American today*" (1972) は，前出 I-3)，p. 385 より転引用.
16) 前出 I-3)，p. 388.
17) H. Edwards, "*Sociology of sport*" (The Dorsey Press, 1973).
G. H. Sage, "*Sports and American Society*" (Addison-Wesley, 1974).
J. A. ミッチェナー，宮川毅訳「スポーツの危機」サイマル出版会，1978.
18) 前出 16)，pp. 381-420.

III ソビエトスポーツイデオロギー

J. Riordan は，国際スポーツ界との関連で，ソビエトの体育・スポーツの歴史的区分を次の様に概観している[1]。

A. 1917—1928: プロレタリヤ国際主義の推進としてのスポーツ

B. 1929—1939: ソビエト連邦国家の強化と反ナチズム

C. 1939—1941: ドイツ枢軸国との平和的スポーツ交流

D. 1945—: 大国主義的スポーツの展開

また富山は，ソビエト体育・スポーツの理論的発展に力点を置いた分析を通して，社会主義スポーツ論の時代区分として次の様な概括を試みている[2]。

1917—1925: プロレトクリト的スポーツ論

1925— : 規範的体育・スポーツ論

1948— : 覇権的スポーツ論

1960— : 社会現象としての体育論，ブルジョアスポーツ論の批判

1966— : 修正的体育・スポーツ改革論

ところで，B. A. Ивонинаは1917年以後，今日までのソビエト体育・スポーツの歴史的展開について，次の様なエポックをあげ，その большого пути の諸段階を略述している[3]。

1918，全ロシア中央執行委員会（вцик）[4] は《戦斗訓練の任務に関して》という法令を採択した。これは，スポーツクラブや普通教育，体育等における戦争準備教育であり，体育・スポーツを国家的にコントロールするソビエト最初の普通軍事教育—Всевобуч—の確立である。

1919. 4，体育・スポーツと壮丁軍事教育に関する第1回全ロシア労働者会議が開かれた。身体的に全面発達した若者の重要性が強調された。

1919. 5. 25，モスクワ赤の広場で今日の伝統となっている体育人，普通軍事教育部隊の最初のパレードが開催された。

1919，レスガフト国立体育大学創設。

1920. 12，モスクワに国立体育研究所を設立する人民委員会（СНК）[5] の法令にレーニン調印する。

1921. 7，赤色スポーツインターナショナル（КСИ）会議がモスクワで開かれた。これは ЛСИ から分離して[6]，政治目的と一致する運動課題を採択し，資本主義に対抗する階級斗争のために，労働者を強化，準備し，ファッシズムスポーツに対抗した。

1923. 6，ロシアソビエト連邦社会主義共和国全ロシア中央執行委員会は体育最高会議（БСФК）を設置した。それは労働者の体育に関する研究，教育，労働者の体育・スポーツ活動への組織化等を統一的な任務とするものである。

1925. 11. 13，ロシア共産党中央執行委員会（ЦК РКП (б)）は《体育分野における党の課題》という決議を採択した。これは共産主義的理想国家のために，ソビエトの体育・スポーツシステムをより高度に発展させ，過去の体育の理論的，実践的偏向を批判して，体育・スポーツの全分野に関して，そのもつ意義についての全般的な指針を論じ，レーニン主義青年共産主義連盟（РЛКСМ）や ВСФК の任務について9項目にわたってのべられている。

1928. 8，モスクワにて第一回スパルタキアード開催される。

1929. 7，СНК РСФК は高等教育機関に体育科目の導入を測定。多くの大学や専門学校に，体育・スポーツ講座が開設された。

1929. 9. 23，ЦК БКП (б) は《体育運動について》という決議を採択。これは記録主義的偏向，省庁間のセクショナリズム，労働大衆への取組みの不充分さ等に触れる中で，体育・スポーツのもつ積極的意義，その国家的コントロールの必要性がのべられている。

1930. 4，ЦИК は，身体文化とは労働力をより強化し，健全にすることとしっかり結びついているという決議を採択。

1931. 3，レーニン主義コムソモール，総合運動《労働と祖国防衛のための準備》，ГТО を主導する。（第1段階）

1932. 4，ГТО をより高度なノルマに改正（第2段階）。

1933. 3，人民労働委員会は労働現場に体操を導入し，現場労働や事務労働力の向上に資

する。

1933. 11, モスクワに中央体育科学研究所設立。1966 年に全ソ体育科学研究所に改称[7]。

1934. 4, 青年のための ГТО が制定される。

1934. 5, ЦИК ССР は《スポーツマスター功労章》の制度を導入。

1935, 全ソスポーツに段位制等の階級制を導入。これは全ソビエトスポーツマンのより一層高次のスポーツ活動達成に良好な刺激を与えた。

1935, 《スポーツマスター》の導入。

1935, スポーツマンの自主的組織《スパルターク》《ロコモティーフ》《紅旗》創設。

1936. 7. 21, ЦИК と СНК СССР は《ソビエト連邦社会主義共和国人民委員会による体育・スポーツ委員会の教育に関して》を採択。

1939. 6. 16, 体育の日を制定, 1961 年より 8 月の第二土曜日。

1942, 公的な体育指導者制度の導入。

1943. 6, 専門技術学校学生の自主的スポーツ組織《労働予備軍》創設。

1945. 9. 28, СНК СССР は《体育・スポーツの役割及び労働力向上に関する委員会の任務を援助することについて》を採択した。これは体育・スポーツのより一層の発展のための豊かな条件をつくり, スペシャリストを準備し, 全てのスポーツマンの仕事を自由にし, 戦争に必要な準備と国家検定トレーナー制度の設立等について論じている。

1946, ソビエトスポーツ組織の序曲, 即ち重量挙げとフットボールの国際スポーツ連盟への参加。

1946. 10, 《体育・スポーツ優秀章》の導入。(1969. 7. 30 内閣体育・スポーツ委員会制定)。

1947, 内閣決議《ソビエトスポーツマンのスポーツ技術達成を賞するメダルとバッヂ制定に関して》を公布する。

1948. 12. 27, ЦК ВКП (б) は《わが国の大衆的体育運動とソビエトスポーツマンの技術向上に関する党及び政府の指令についての体育・スポーツ委員会の遂行活動》という決議を採択。

1951, ソビエトオリンピック委員会は国際オリンピック委員会 (MOK) に加盟。

1952. 7—8, ヘルシンキオリンピックに初めて参加。

1956. 1—2, コルチナダンペッチイオ冬季オリンピックに初めて参加。

1956. 3, 内閣体育・スポーツ委員会は《エスエスエスエルトレーナー功労章》創設。

1959. 4. 9, ЦК КПСС と内閣は,《わが国における体育・スポーツの指導原理》を採択。それは, ソビエトにおける連邦スポーツ組織を建設する体育運動の方向と協力共同の目的に関して論じ, 党の機関の指導の下に, より広範な大衆的スポーツマンの自主性, 創造性を基礎にして, 労働組合やコムソモールの日常的, 積極的参加の必要性についてのべたものである。

1960, より優れた体育集団のスポーツクラブへの組織がえ。これは自主的な体育運動の一層高次な最初の組織形態である。

1961. 10, クレムリン宮殿で開催されたソビエト共産党（КПСС）第 22 回大会は，共産主義のプログラムを決定し，体育・スポーツの課題を論ずる中で，体育・スポーツは人民の日常生活に強い関心をもたなければならないと同時に，若者をより豊かに教育し，身体的精神的に調和した発達を促がす意義について訴えている。

1966. 8, ЦК КПСС は《体育・スポーツを一層発展させる方策について》を採択[8]。これは大衆的体育に関する КПСС のプログラムに示された生活指標を具体的に遂行する党や行政機関，経済や社会的組織の活動のための文書として，重要である。

1968. 連邦共和国体育・スポーツ委員会の設立。これは 1959 年に設置された連邦スポーツ組織を改組したものである。これはソビエトにおける体育・スポーツの役割を良好に指導する委員会に，国家的権威を与えた。

1969. 第 3 回連邦コルホーズ会議は，農村労働者の体育の必要性について重大な関心を払った。(1969. 11. 28 の ЦК КПСС と連邦内閣の見解に示された例による[9])。

1969. ソビエト最高会議は《健康保護のための連邦及び連邦共和国の基本法制》に関する見解を採択した。それは体育・スポーツ及びツーリズムの組織に関して，49 の質問項目にわたって，《政府機関，労働組合連盟，コムソモールとその協同機関，スポーツ組織，事業所，その他の施設機関は，体育一保健活動のために協力しなければならない》こと等を指摘し，《スポーツマン，ツーリストは国民の中で活動し，体育やツーリストクラブの集団を組織，強化し，労働体操を普及しなければならない》ことを訴えている。また放課後及び校外での子どもや普通教育，専門技術学校，中等専門学校，高等教育機関等における体育の任務を企画し，市民の健康保持のための医学的コントロールや体育・スポーツ活動を実施すること，健康保護施設を実現することの等の必要性について論じている。

1969. 5, ЦК КПСС 及び ВЦСПС[10] は，《わが国におけるツーリズム，観光旅行をより一層発展させる方法について》を採択。

1970. 10. 23, 連邦内閣最高会議及びソビエト内閣体育スポーツ委員会協議会は，《普通教育学校における体育の回数に関する規定》を採択。これは体育と労働及び実用的な戦斗教育との関係を強調している。

1971. 9. 1, ソビエト内閣職業教育委員会と内閣体育・スポーツ委員会は《職業教育学校における体育の回数に関する規定》を採択。

1972. 3, ГТО に新しい規準が導入される。

1974. 3, 内閣体育・スポーツ委員会は《体育・スポーツの発展に寄与した功績を称える賞》を制定。これはソビエトの体育・スポーツ発展に寄与した個人，組織に与えられる。

1975, 第 6 回スパルタキアード開催される。約 8000 万人参加。

1975. 10, ВЦСПС 及び ЦК ВЛКСМ の書記局，内閣，内閣体育・スポーツ委員会は，ソビエト連邦の子どものスポーツ活動《希望への出発》の遂行に関する決議を採択した。

1976. 2. 第 12 回インスブルック冬季大会に参加。

1976. 2—6, КПСС 25 大会は《1976—1980 年国民経済発展の基本方針》を採択。これは国民経済発展に伴う体育・スポーツ施設，設備の充実，住民の体育・スポーツ活動やス

ポーツ，旅行用具の開発，未成年者や青年のためのスポーツや保健運動等を網の目の様に発展させ，住民の健康や自由時間の有効な利用，余暇の活動的休息を組織，改善することの意義を訴えている。

以上は，B. A. Ивонина のソビエトスポーツの歴史的素描であるが，いずれにしても，体育・スポーツにおける変化は，党中央委員会，政府の政策変更に従うものであることが理解される。

ところで，ソビエトにおける身体文化(Физическая культура)，身体教育(Физическая Воспитания)，スポーツ (спорт) という用語の術語的身分関係に関しては，田中の論稿があるが[11]，ここでは Б. А. Ашмарина の説明に従うことにする[12]。

図1に見るように，身体文化は社会の物質的，精神的価値の総体であり，全文化の一領域をなし，その創造的応用によって人間の身体的完成に関連するとされる。

身体文化の実践行為は身体教育として現われる。教育は目的志向的に，社会の政治的，道徳的，美的理想に合致する人間的資質を形成することであるが，身体教育は，人間を身体的に完成させる教育的システムといえよう。身体教育の課題は，身体文化の内容を人々が容易に獲得しやすくする教育システムを構成することにあると位置づけられる。スポーツは斜線で表示されているように，身体文化の一形態であり，物質的富の生産には無関係であるが，それは教授—学習過程に従って，身体文化の教育とその伝承機能を有する。スポーツは，身体的精神的資質を最高度に発達させる身体教育の有効な手段と方法であると位置づけられよう。

図2は，こうした身体文化，身体教育とスポーツとの相互関連における体育組織の国家的組織形態の概観図であるが，このことからソビエトスポーツの国家的統制の強固さを結論づけることはできない。わが国に於ても，文部省—都道府県教育委員会—市町村教育委員会—学校体育・社会体育，文部省—日本体育協会—翼下加盟各スポーツ団体その他，体育・スポーツの国家的組織形態の網の目は発達し，プロスポーツも含めて，なんらかの国家的統制下にある。問題は，公権力のスポーツ政策として，スポーツと政治の関係をどの様に位置づけるかにその焦点が存在するが，ここではそれをソビエトにおけるブルジョアスポーツイデオロギー批判の理論的検討を通して接近する。

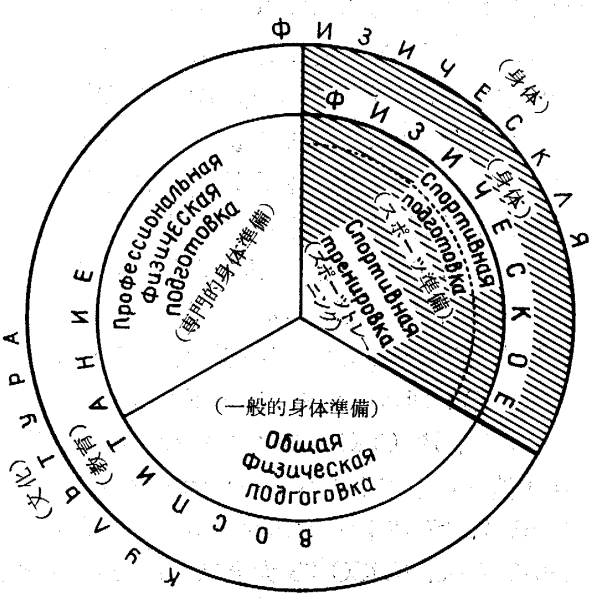

図 1.　基本的概念の相互関連[12]

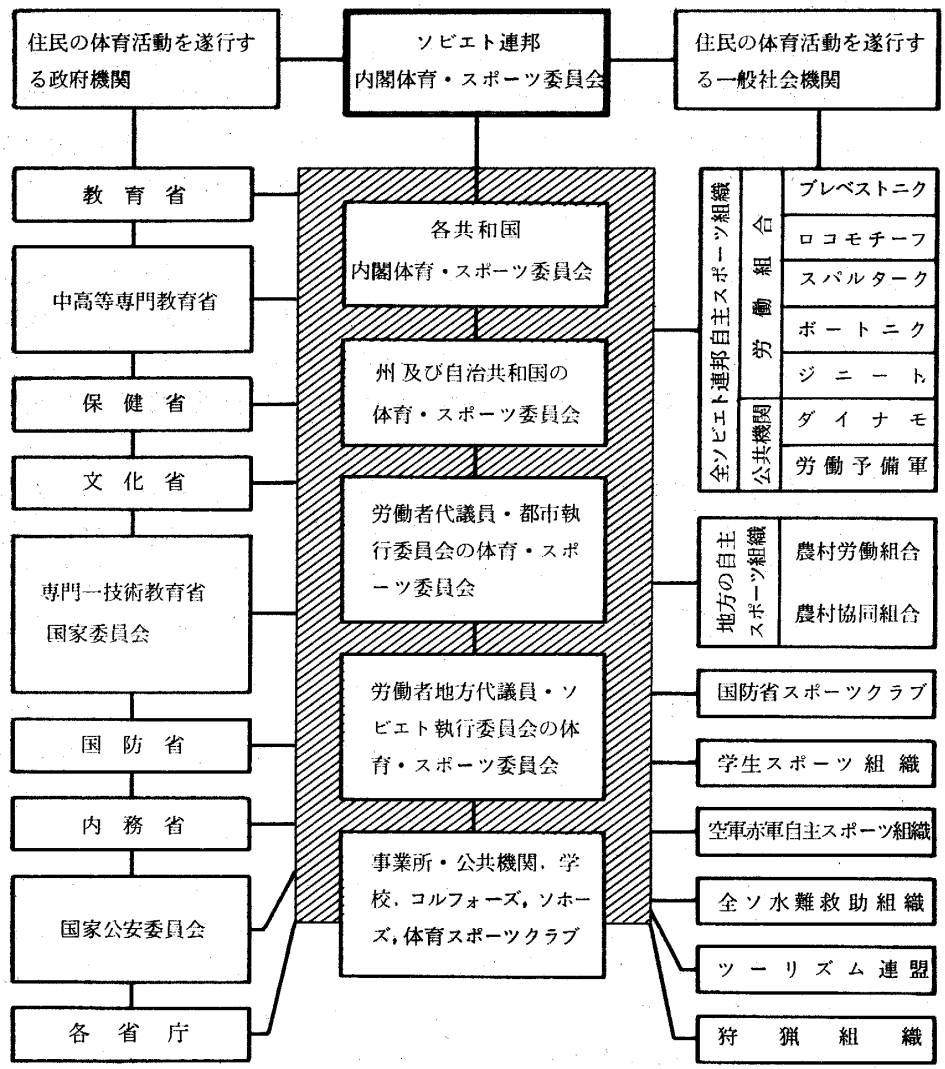

図 2.　CCCP の体育組織の国家的形態[13]

既にのべたように，体育は人間の調和的発達をめざす教育の重要な構成要素であり，それは社会主義社会の発展と無関係でないばかりか，反対にそれは社会や経済の他の領域に影響を及ぼすという Кузьмак Б.С の主張にみるまでもなく，それは社会主義建設とその防衛に関係している[14]。

ところで，スポーツは社会的疑集力 (Социалиного сцепление) を高めるのに効果があるとされるこの国において，そのイデオロギー的機能は資本主義社会とは異っていると位置づけられている[15]。即ち，社会主義社会では大衆の知識，理解力を高めるために身体文化は重要視されるが，資本主義社会では大衆の知識を操作するために利用されると批判する。ブルジョアスポーツは，資本主義の矛盾に対する大衆の攻撃衝動 (агрессивные инстинкты) の通路《Канал》として利用されていると見做されるのである。

M. Я. Сараф によれば，ブルジョアスポーツは，まるで階級を統一する性格を本来的にもっているかのようであり，これはブルジョア社会にとって，根本的な社会変革の必然性を否定するスポーツイデオロギーの反映であり，スポーツによる階級斗争の牽制，後方攪乱 (диверсионной функци) であり，労働者を生活上の難儀から，あるいは階級斗争から遠ざけるスポーツによるアジテーション (спортивный ажиотаж)[16] と批判されるのである。

このようにスポーツは社会生活の表現として，社会経済構造を反映するが，利潤追求を第一の目的とする資本の論理の貫徹する社会に於ては，スポーツも金儲けの手段に転化すると指摘する中で，資本主義社会のスポーツ産業やプロスポーツの在り方に厳しい批判の目を向けるソビエトは，スポーツの社会的基礎，身体文化の社会的本質[17]を無視するスポーツ理論，スポーツ社会学方法論をも厳しく批判する。

スポーツと労働を対比して敵対的関係においてとらえ，スポーツにおける個人の内面的側面を過大に評価するスポーツ理論は，スポーツの本質をゆがめ，スポーツの私的利潤追求の手段化への道を開き，あるいはナチオリンピックにみられるように，社会的政治的空論としてのプロパガンダに利用され，それはかつての「地政学」と同様に，侵略的性格を担わされることにもなると批判するのである[18]。

今日の資本主義諸国の体育・スポーツ理論に支配的影響を与えている K. Diem は，スポーツを「技術文明に対する抵抗であり，ロマンであり」「それは自由な選択であり，なにものかである」と論じ，産業化と都市化による現代文明における労働と生活の変化の中でスポーツは一つの「気晴らしであり」「リラクゼーションである」と主張する[19]。それはブルジョワスポーツ社会学で流行している所謂「補償理論」(compesation theory, Теорией компенсации)[20] の一つの典型といえるが，自然と文明，科学と人間，都市と農村を対立的にとらえ，生活様式の変化に伴う運動不足に由来する様々の精神的身体的不都合を，社会的諸関連の中に位置づけて解決するのではなく，単にスポーツによって解消できるとする一種の素朴主義 (примитивизм) とも批判されるのである[21]。それはまた一つの「生物学主義」でもあり，H. Riss の「Soziologie des Sport」にもみられる理論である。即ち文化の基礎は物質的社会生活の条件にではなく，人間それ自身，精神的志向に存在し，それはまったく個人的なところから生まれるとする考え方である。運動の欲求 (стремления к движения) は一般的に人間に固有な本質であり，生物としての内的衝動によるものであるとする理論は，スポーツ欲求の文化的本質を無視し，П. С. Степовой によれば (1) 本能的 (2) 無自覚 (3) 無目的的性格をスポーツに付与する理論といえよう[22]。同様な観点から，B. ジレ，P. C. マッキントッシュ，その他が批判されるのであるが，その批判の理論的枠組は，スポーツを ① 自由な活動 (свободной деятельности) ② 無目的的行為 (Бесцельной деятельность) ③無償性 (Незаинтересованнои) ④中立性 (Нейтральность) 等にその本質をみるスポーツ理論の非科学性，恣意性が問題とされる[23]。

問題の本質は，スポーツの自由は富める者にも貧しい者にも平等に開かれているというが，それは「平等な可能性」(Равных Возможность) の幻想であり，スポーツの自由はも

ちろん，スポーツマンの自由もその現実は，冷酷な利益追求というメカニズムに従属する自由が存在するだけである[24]。「補償理論」は心理的な言葉で，その必要性について論じ，個人的な健康を提起するが，しかしそれは決して，その社会的保障 (социальных гарантии) を提起しない[25]。この様にスポーツを個人の私的な内面的世界の領域にとじこめ，自由な活動，無目的無償の行為，純粋中立性等にスポーツの本質をみるスポーツ観念は，スポーツにおける個人主義，排外主義を助長し，知性を麻痺させ，若者から政治への参加を遠ざける機能を期待するものといえよう[26]。いずれにしろ，スポーツは政治に従属しているのであるが，ブルジョアスポーツ理論はただその事実に無知であるか，無視しているに過ぎないと批判するのである[27]。

ソビエトスポーツイデオロギーは，スポーツと政治の間に「無償の行為」「中立性」などという政治的ベールをかぶせず，スポーツは政治に従属する二次的性格をもつものと規定する。スポーツは，《не может стоять вне политики》なのである[28]。

労働は人間にとって本質的なものであり，最初の歴史的行為として対象的自然を変化させるだけでなく，自分自身の自然（天性）をも変化させる人間的活動と理解するソビエトスポーツイデオロギーは，スポーツはその労働のために人間の身体を準備するものと位置づける。それは社会の生産力水準の要求に応え，人間を成長させる必然的な合目的的行動の一つと理解するが[29]，同時にそれは人間の社会的資質を形成する教育機能，体育の効果的な手段として理解されている。それはものの見方，考え方 (Мировоззренческо—нравственной) 世界観，道徳性を培い，自己犠性や集団への忠誠等，スポーツマンの好もしい徳性，祖国愛 (патриотизм)，集団性 (коллективизм)，ヒューマニズム (гуманность)，謙虚さ (скромность)，勤勉 (трудолюбие) など，まさに社会主義的モラルと合致し，それを賦括増強する機能をもつものと位置づけられている[30]。このように①スポーツのもつ価値を積極的に活用し，国内外への煽動 (агитации) に利用し，②人類文化の重要な領域として，共同と交流をはかり，③人々を新らしい社会へと準備し，スポーツ活動を通して社会主義と資本主義競争において，全面的に発達した人間の卓越性を事実で示し，④社会主義スポーツを誹謗中傷するあらゆる種類の口実を暴露し，理論的思想的にたたかい，スポーツの社会的本質を歪め，国際スポーツにおけるアマチュアリズム，即ち любых форм というデイレッタンチズムの差別に反撃する課題を，スポーツにおける平和共存の問題ととらえるソビエトスポーツにおいては[31]，スポーツの「政治的中立性」とは，無縁のスポーツ観念と理解されよう。

ところで，これまでみてきたように，スポーツは文明の悪魔《кошмара》から自由を保証すると主張するブルジョアスポーツイデオロギーに対して，批判的見地をとるソビエトスポーツ理論も，スポーツは社会体制の如何にかかわらず，“opiates of the masses” という機能をになっているという見解に[32]，反論することは難しいようにも思われる。スポーツ独自の論理よりも，社会主義社会建設という政治目的達成のために，スポーツを最大限に利用するという政治の論理が優先するソビエトは，ある意味ではスポーツの手段化が，最も進行した国家であるといえるかも知れない。しかもそれは政治の unobtrusive form

として洗練化され，理論化されればされる程，スポーツは opiate として精製されていくことを意味する。

それではスポーツの「政治的中立性」「政治からの独立」とはどのようにして達成されるのであろうか。なによりもまずそれは，スポーツを歴史的，社会的諸関連の中においてとらえる視点が必要といえるだろう。スポーツマンは政治的無知によってではなく，スポーツにおける「政治的中立性」をその政治的識見の豊かさによって支えなければならない。スポーツ組織の財政的基盤を確立し，組織的に自律し，政治的活動を抑制するのではなくて，逆に政治的活動の自由を保障する中で，その理念の現実的意義が歴史的に検証されていくといえるだろう。スポーツの自由とは，市民的，政治的自由と一体のものであり，G. イエリネックを援用すれば，それは国民が政治の世界で，真に「主動的地位」を確立する社会をまたなければならないが[33]，それにはスポーツマンの歴史における創造的役割 (schöpferische Rolle der Sportsmann) が必要とされるのである。

注

1) James Riordan, "*Sport in Soviet Society*" (Cambridge, 1977), pp. 348-395.
2) 冨山 清「ソ連におけるスポーツ論の展開」『佐賀大学教養部研究紀要』No. 8, 1976. 同論文は「社会主義的スポーツ論—ソ連におけるスポーツ論の展開—」として，中村敏雄編『スポーツ・ナショナリズム』大修館に収録されている.
3) В. А. Ивонина, "*спутник, физкультурного работника*" (Москва, 1977), pp. 3-39.
4) Всероссийскии Центральный Исполнительный Комитет (1917-1936).
5) Совет Народных Комиссаров (1917-1946).
6) Люцернский спортивный интернацинал, Красный спортинтерн.
7) ВНИИФК (Всесоюзный науцио-исследовательскии институт физицеской культуры).
8) 前出 2) 冨山論文では 1968 年となっている.
9) 前出 3), p. 36 "Утвержден цк кпсс и Советом Министров СССР, 28 ноября 1969 г." の抜萃.
10) Центральный Комитет Коммунистическая партия Советского Союза Всесоюзный Центральный Совет Профессиональных Союзов.
11) 田中良子「ソビエトにおける［身体文化］の考え方」『体育科教育』1976. 6.
12) Б. А. Ашмарина, "*Теория и методика физического воспитания*" (Москва, Просвещение, 1979) pp. 10-36.
13) Г. И. Кукушкин, "*Советская система физического воспитания*" (Москва, 1975) p. 77.
14) Б. С. Кузьмак, А. А. Осинцев, "*Социально-экономические проблемы физической культуры и спорта*", (Москва, 1976), p. 5.
15) В. М. Выдрина, "*Спорт в Современном обществе*", (Москва, 1980), pp. 100-109.
16) М. Я. Сараф, "*Спорт и Личность*" (Моска, 1975), p. 27.
17) С. Я. Чикин, "*Физическое совершенствованъе человека*" (Москва, Медицина, 1976) には史的唯物論の立場からの人間の身体的諸形質の歴史的形成過程が論じられている.
18) 前出 16), p. 25.
19) K. Diem, "*Wesen und Lehre des Sports*" (Berlin, 1949), 福岡孝行訳「スポーツの本質と基礎」法政大学出版局，1978.
20) Н. И. Пономарев, "*Социалые функции физической культуры и спорта*" (Москва, 1974), p. 57.
S. Pavlov, "*Physical culture and sport in socialist society*" in the USSR: sport and

way of life, (Mockow, 1980), pp. 7-24.
А. Д. Новиков, "*Теория и Методика Физического Воспитания*" (Москва, 1976), pp. 57-60.

21) 同上, новиков, p. 57.
22) 前出 16), сараф, pp. 24-26.
23) 前出 20), пономарев, ①—p. 9, ②—p. 8, ③—p. 9, ④—p. 14.
24) 前出 16), сараф, p. 60.
25) 前出 20), новиков, p. 60.
26) 前出 20), пономарев, p. 15. 日本では所謂, 映画, セックス, スポーツの「3S 政策」がそれである.
27) 同上, p. 14, 前出 16), сараф, p. 54.
28) 同上 16), сараф, p. 54.
29) 前出 20), новиков, p. 58-59.
30) 前出 16), сараф, p. 58.
31) 前出 15), выдрина, p. 67.
32) 前出 1), Riordan, p. 398.
33) NHK 大学講座法学 1「憲法と人権」(1974. 4～6) p. 38-42 より転引用. こうした観点から拙稿「スポーツ権論のイデオロギー」『体育研究』日本体育学会神奈川支部紀要 No. 14, 1981 は, スポーツイデオロギーの社会学的生産力について論じている.